

朝堂院の調査

—第107次

1 はじめに

今回の調査地は、藤原宮の中心部に近い朝堂院の一角で、大極殿院の南東にあたる。この場所では、1939～40年にかけて、日本古文化研究所（以下、古文化研究所と略）が部分的な壺掘り・布掘り調査をおこない、朝堂院東第一堂および朝堂院北面回廊と東面回廊を検出した。その結果、回廊は礎石建ちの複廊であることが判明し、東第一堂は桁行9間、梁行4間の総柱礎石建物であると復原されている。

しかし、古文化研究所の調査は柱位置のみを掘るものであったため、基壇外装や雨落溝の状況など、建物の詳細については不明であった。また、その後、前期難波宮、平城宮、後期難波宮、長岡宮などの諸宮で朝堂院の調査が進展し、それらの朝堂に総柱建物は見られないことが判明する。したがって、藤原宮のみが特殊な様相を示すことになり、議論の対象となってきた。

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、古文化研究所の調査で残された研究上の課題を解決し、さらに新たな知見を得ることを目的として、藤原宮中枢部を面的に広く再発掘する調査を昨年度から開始した。

昨年の第100次調査では、大規模な礎石建物をはじめ、回廊の東北隅と内裏外郭南限の掘立柱塀を確認し、藤原宮期の遺構の状況が明らかになった（『年報2000-Ⅱ』）。また、藤原宮直前期の遺構として、「先行条坊」の四条大路・東一坊坊間路と、それより古い、いわば「先々行条坊」の四条大路と東一坊坊間路のほか、宮造営時の運河と推定した溝SD9005の一部を検出した。しかし、先行四条大路南側溝と推定した溝以南の先行東一坊坊間路が不明瞭なこと、「先々行」東一坊坊間路の検出も四条大路以北に限られ、以南の状況は不明であること、SD9005も北肩のみの検出であることなど、課題も残った。

今回の調査は、朝堂院東第一堂の北半と回廊の東北隅部を対象とし、その状況を明らかにすることと、古文化研究所の調査や第100次調査で残された課題の解決を目的とした。調査区は昨年の第100次調査区と一部重複させて、東西57m、南北54mの約3140㎡の範囲とした。調査期間は3月23日～11月2日である。

2 検出遺構

調査区の基本的な層序は、上から整備盛土、旧耕土、床土、茶灰色砂質土の遺物包含層で、旧地表下約30～50cmで藤原宮期の遺構面に達する。遺構検出は、調査区の北1/3では茶褐色の古墳時代の遺物包含層、それ以南は黄褐色粘質土の整地土上でおこなった。藤原宮造営に伴う整地土は、残存状況の良好な部分では厚さ40cmに及び、4層に分かれる。その下に厚さ約10cmの藤原京造成時の整地土があり、それ以下は藤原京以前の堆積層、地山となる。

検出した遺構は、大きく古墳時代、7世紀前半、藤原宮直前期、藤原宮期、奈良時代以後の5つの時期に区分できる。主な遺構として、藤原宮朝堂院東第一堂と回廊、内裏外郭南限の掘立柱塀、宮に先行する条坊道路の側溝、奈良時代の建物と溝、平安時代～鎌倉時代の集落などがある。以下、時代を追って記述する。

古墳時代～7世紀前半の遺構

古墳時代の遺構は、主に調査区北半に小土坑や斜行溝が点在する。5世紀後半～6世紀前半の土器および埴輪が出土した。

SX9091 第100次調査区の南壁の位置から南へ急激に下がる沼状地形。北肩がほぼ直線的に東西に延び、人工のものである可能性もある。断ち割り調査の所見では、底は平坦ではなく、部分的に高まりがある。時期は不明であるが、後述する飛鳥Ⅰの土器を出土する溝SD8992よりは古い。暗灰色の粘土が堆積し、藤原宮期の遺構はこれを埋め立てた整地土上につくられている。

SD8992 第100次調査で検出した飛鳥Ⅰの土器を出土する斜行溝。本調査区では、東端でその続きを一部検出し、発掘区外に延びる。

藤原宮直前期の遺構

藤原宮直前期とみられる遺構として、8条の溝がある。これらは、藤原宮に先行する条坊の側溝と、藤原宮造営時の排水溝である。

SD8993 内裏外郭南限塀SA8990の南にある東西溝。第100次調査で「先々行」四条大路南側溝に比定し、今回もそれを追認した。幅1.5～1.8m、深さ約1.2mあるが、遺物は少なく、土器が若干出土するのみである。「先々行」四条大路の幅は、側溝心々間で14m(40大尺)。

SD9005 藤原宮造営時の整地土下で検出した東西溝。第100次調査で北肩を検出し、今回、南肩を確認した。幅約1.5mで、深さは1m以上あり、先行東一坊坊間路両側溝SD524・SD878が接続する。第100次調査では、大極殿北方の調査などで発見した、宮造営時の運河SD1901Aと一連のものと推定していた。しかし、今回、溝幅が予想より大幅に狭く、かつ先行東一坊坊間路両側溝が接続する事実が判明し、SD9005は先行四条大路の南側溝であることが確定した。この結果、先行四条大路の幅は、第100次調査の想定と異なり、側溝心々間で16m(45大尺)となっており、他の偶数条坊大路と一致する。

SD524・SD878 先行東一坊坊間路SF8980の両側溝。調査区東端のSD9005に接続する部分で、宮造営時の整地土を除去して検出したほか、調査区南端の壁面でも確認した。東側溝SD878は幅約1.2m、深さ0.6m、西側溝SD524は幅約1.0m、深さ0.6mを測る。東一坊坊間路の幅は、側溝心々間で約7m(20大尺)となる。

第100次調査では、先行四条大路以北の東一坊坊間路は、「先々行」「先行」の2時期の遺構を検出した。しかし、今回の調査成果によれば、先行四条大路以南の東一坊坊間路は1時期のみであり、第100次調査の「先々行条坊」に比定できる溝はない。また、第100次調査で確認した坪外周を区画する堀も検出できなかった。

SD8991 北面回廊南雨落溝SD9001の下層にある東西溝。第100次調査ですでに検出しており、幅約1.0m、深さ約80cmを測る。埋土は、下層に暗灰色の粘土が堆積し、上層は黄褐色の粘質土で埋められた状況を示す。第100次調査では、先行四条大路南側溝と推定していたが、SD9005および後述するSD9080との関係から、藤原宮造営時の排水溝と考えられる。

SD9040 東面回廊東雨落溝SD8975の下層にある南北溝。北面回廊の北雨落溝SD8999を越えて北に延びる。幅約0.7m、深さ約20cm。暗灰色の粘質土が堆積し、藤原宮造営に伴う木材のはつり屑とみられる多量の木屑を含む。上層は黄褐色の粘質土で埋められている。

SD9080 東面回廊西雨落溝SD9002の下層にある南北溝。幅約0.6m、深さ30～60cmで、SD9055とL字形に接続し、調査区南端までは続かない。北はSD8991に接続する。SD9040と同様の埋土で、多量の木屑を含む。

SD9055 調査区の南半で東面回廊を横切り、SD9080

に接続する東西溝。東端部は削平されている。幅約0.6～1.2m、深さは最深部で約60cmある。黄灰色の粘質土で人為的に埋められている。

SD9085 第一堂の北約3mにある東西溝。幅約70cm、深さ約40cmで、底部には砂が堆積し、上部を礫で覆う。東はSD9080まで延びて、T字形に接続する。

SK9051 調査区東端にある土坑。藤原宮造営時の整地土に覆われる。大量の瓦が出土した。

藤原宮期の遺構

朝堂院東第一堂SB9100 調査区の西南部にある基壇上の礎石建ち南北棟建物で、建物の北半部を検出した。古文化研究所の調査により、桁行9間、梁行4間で、四周に廂がつく建物であることが判明している。

今回の調査では、礎石据付掘形を22箇所確認した。礎石据付掘形の平面は、東西約2m、南北約1.5mある。礎石は8個遺存するが、いずれも落とし込んだもので、原位置からは動いている。いずれも大ぶりの花崗岩で、造り出しなどはない。柱間は、身舎が桁行・梁行ともに4.2m(14尺)、廂の出は3.0m(10尺)で、建物の全長は、桁行118尺、梁行48尺となる。

基壇の築成にあたっては、とくに掘込地業はおこなわず、藤原宮造営時の整地土上に、栗石を入れながら基壇土を突き固めている。その後、礎石据付掘形を掘り下げて栗石を密に入れ、その上に根石を置いて礎石を据える工程をとる。ただし、削平のため、原位置に残る根石や礎石はない。

今回の調査では、古文化研究所の調査で根固め栗石の存在を認めていた身舎内部の棟通りに、栗石の存在は確認したものの、据付掘形は検出できなかった。また、この部分の栗石は、ほかの礎石据付掘形内の栗石に比べて、明らかに疎らである。古文化研究所の調査は、柱位置のみの布掘り・壺掘り調査であったため、基壇土中の栗石を礎石の根石と誤認したものとみてよい。したがって、身舎内部の棟通りには柱が立たず、藤原宮においても朝堂院東第一堂は総柱建物ではないことが判明した。第二堂以下についても同様と推定できる。

東側柱と北妻の柱位置から約2m外側には、基壇の地覆石を据えた痕跡と考えられる溝がある。また、その一部に凝灰岩の粉末が残り、周辺から凝灰岩の切石も出土していることから、基壇外装は凝灰岩を用いていたと推

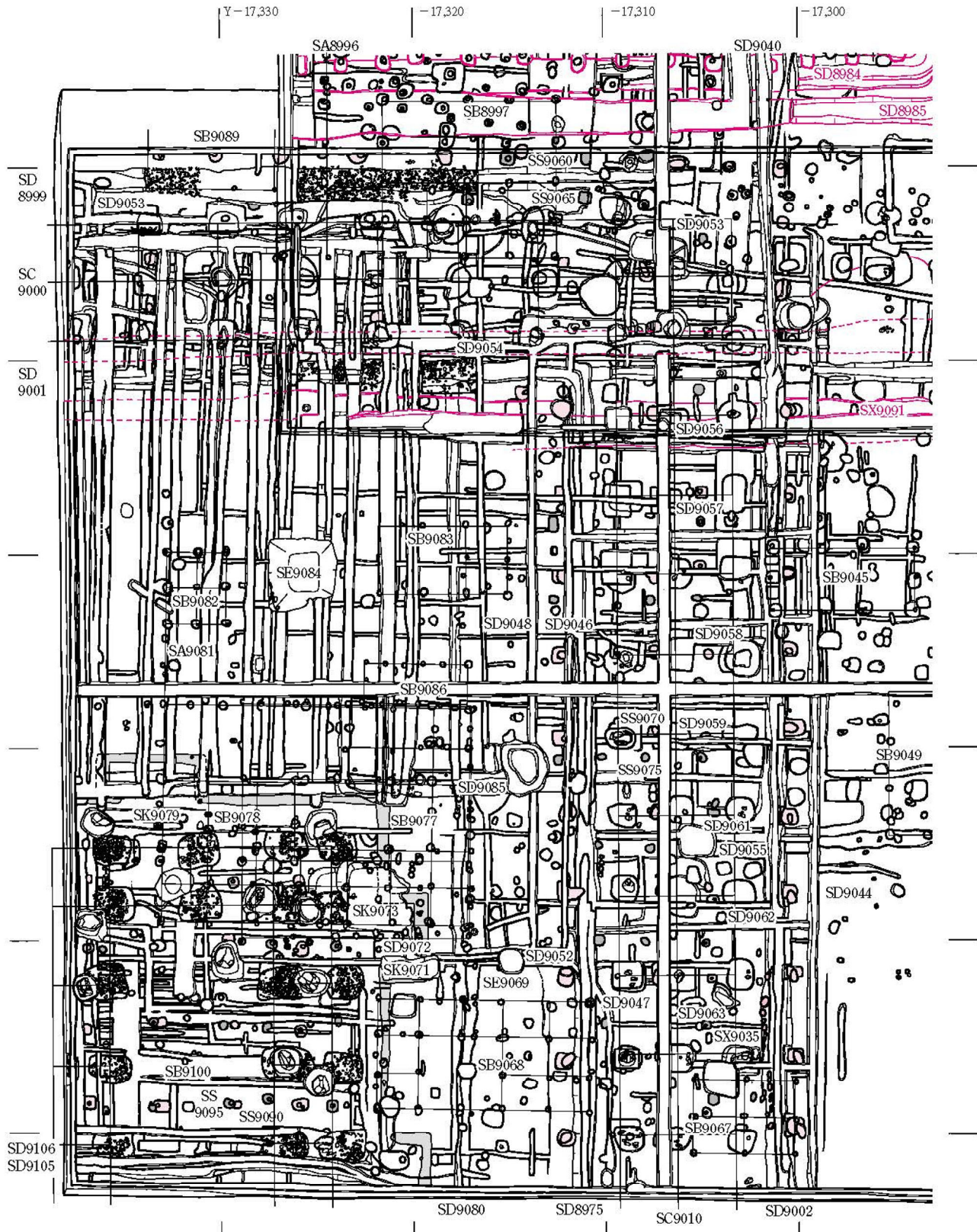
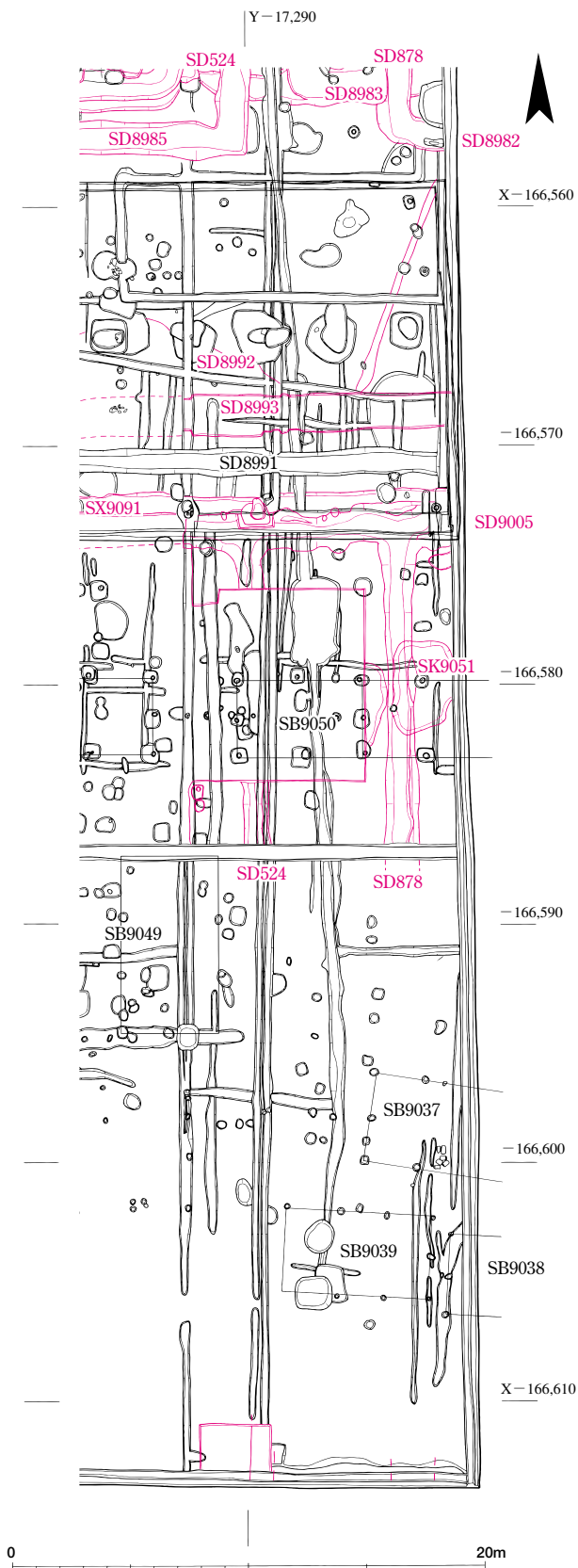


図57 第107次調査遺構図 1:300



定される。この溝は、北側では西から2間目、東側では北から2間目と5間目で、約2.6m外に突出するが、これは階段の痕跡であろう。全体では、北面と南面に1箇所ずつ、東面と西面は3箇所ずつに階段がつくと考えられる。ただし、この据付溝はきわめて痕跡的なため、現状では以上のように判断したが、将来の建物南半部あるいは第二堂以下の調査を待って確定させるべき課題である。ちなみに、建物の周囲に雨落溝は確認できない。平城宮第二次朝堂院上層建物のように、周囲に礫敷きの散水的な施設があったのであろう。

基壇上には、東西にほぼ柱筋をそろえて足場SS9090およびSS9095があり、重複関係から、SS9090が建設時、SS9095が解体時の足場と考えられる。SS9090は建物の柱筋をはずした配置をとるのに対し、SS9095では建物の桁行方向の柱筋とほぼ一致するものがある。

なお、回廊との位置関係は、東第一堂の北妻から北面回廊の棟通りまでが29.5m(100尺)、西入側柱と東面回廊棟通りの距離も同じく29.5m(100尺)を測る。

朝堂院回廊SC9000・SC9010 朝堂院回廊は礎石建ちの複廊で、北面回廊SC9000を9間分、直角に南に折れる東面回廊SC9010を12間分検出した。第100次調査で回廊の東北隅を確認しているため、今回新たに検出したのは、SC9000が3間分、SC9010では9間分である。朝堂院回廊の規模は東西約230m、南北約320mと復原されていたが、第100次調査の報告が述べるように、東西幅については、中軸線から東面回廊棟通りまでの距離を折り返すと、235mとなる。

両回廊ともに、柱間は桁行4.2m(14尺)、梁行3.0m(10尺)で、隅の2間分は桁行・梁行とも3.0m(10尺)である。礎石は北面回廊で7個、東面回廊で2個、隅部分に2個残るが、原位置にあるのは7個で、それ以外は落とし込まれるか、もしくは抜き取られている。礎石は花崗岩で、上面を平滑に加工するが、造り出しなどは見られない。礎石の下には人頭大の根石を入れる。

回廊は、藤原宮造営に伴う整地土の上であり、回廊本体の基壇土は東面回廊部分に比較的良く残っている。回廊に囲まれた内部は、外側より一段高い。SC9000とSC9010の側柱位置から約2m外側には、雨落溝SD8999・SD9001とSD8975・SD9002がある。いずれも幅1m前後、深さ約10cmで、溝の埋土上面に瓦片が大

量に落下している。SC9010の東雨落溝SD9002、西雨落溝SD8975とSC9000の南雨落溝SD9001は、先行する藤原宮造営時の排水溝を黄褐色の粘質土で埋めた上に造る。また、SD8975は、SC9000の北雨落溝SD8999を越えて北上するように見えるが、この部分では溝を埋めた土はみられず、西への振れが強い。SD8999以北で確認した溝については、SD8975ではなく、前述した下層溝SD9040と見るべきであり、回廊建設以後はSD8999とSD8975はL字状に接続する。

調査区南端では、SC9010の東雨落溝SD8975の西側から玉石の抜取跡SX9035が見つかり、東面回廊の外側については玉石積の基壇外装を施していたことを確認した。回廊の内側については判断する根拠に乏しいが、断ち割り調査の所見からは、凝灰岩を用いた基壇外装を施していた可能性がある。

北面・東面回廊についても、それぞれ足場SS9060・9065とSS9070・9075を検出した。SS9060とSS9070が建設時、SS9065とSS9075が解体時のものである。SS9060とSS9070は、回廊の梁行方向の柱筋に揃えて柱を配する。ただ、東面回廊の足場SS9070は雨落溝の外側にも柱穴があるが、北面回廊のSS9060には、そうした柱穴はあまり見られない。解体時の足場穴SS9065とSS9075の柱位置は、回廊の梁行の柱筋をはずしており、雨落溝外側に柱穴はない。

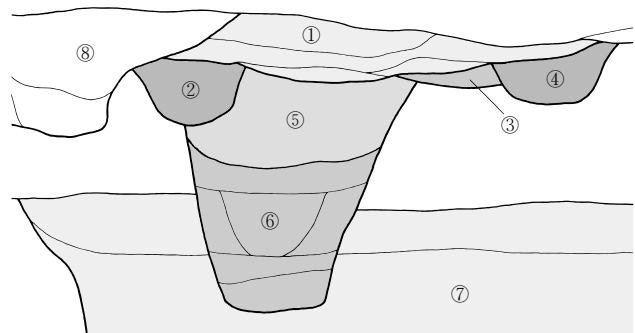
SD9088 東第一堂SB9100の東にある、幅約0.6m、深さ約5cmの南北溝。北流してSC9000の南雨落溝SD9001に接続する。一時的な排水溝であろう。

奈良時代以後の遺構

SD9105・SD9106 調査区南西端で検出した2条の東西溝。南側のSD9105が古い。埋土から瓦や奈良時代後半の土器のほか、土馬が出土した。

SB9045・SB9050 調査区東北部で確認した、東西に並ぶ掘立柱東西棟建物。柱間は、いずれも桁行2.7m(9尺)、梁行1.65m(5.5尺)。SB9045は桁行3間で、梁行2間。SB9050は桁行4間以上、梁行2間で、西から2間目に間仕切りがある。時期は明らかでないが、SB9045の西妻の柱穴は、東面回廊の東雨落溝が埋まった後に掘られている。柱穴の埋土は暗茶褐色土であり、平安時代以降の建物が灰色の粘質土であるのとは異なる。こうした状況から、奈良時代の可能性がある。

Y-17,312 Y-17,311 H=72.00m



① SD9002埋土 ② SD9002側石据付 ③ 回廊造営に伴う整地土
④ 回廊地覆石据付 ⑤ 下層溝SD9080埋立土 ⑥ 下層溝SD9080埋土 ⑦ 沼状地形SX9091埋土 ⑧ 中世溝SD9046埋土

図58 SD9002周辺土層図(東西畦部) 1:20

SB9049 東面回廊の東にある3間×2間の掘立柱南北棟建物。平安時代～鎌倉時代のものであろう。

SB9037～SB9039 調査区東南部にある掘立柱建物。いずれも小規模な東西棟で、方位は東で南に振れる。これまでの調査例からみて、平安時代の可能性がある。

中世の遺構

本調査区では、西半部を中心に、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物や井戸、溝などの遺構を数多く検出した。家族単位の宅地が南北に2つ並立しているものとみられ、中世の社会を研究するうえで貴重な事例となる。以下、便宜的に南の宅地、北の宅地と呼称する。遺構群は、大きくA期、B期の2時期に分かれる。今回検出した遺構はほぼ方位のついであり、条里制との関係においても興味深い。同時期と目される遺構は第100次調査でも検出しており、ここではそれも含めて報告する。

A期 調査区西北部にある東西溝SD9054が、南の宅地と北の宅地の境界である。南の宅地ではSB9077を主屋として、その南にSB9068が建つ。さらに東にはSB9067があり、計3棟が建ち並ぶ。SB9077は東西5間、南北6間の正方形に近い平面になる。全体で1棟の建物であろうが、南北に並立する東西棟2棟を連結した形とみることできる。SB9068は東西5間、南北3間の建物で、総柱風だが、1箇所だけ柱穴がない。SB9067は2間×2間の総柱建物である。

SB9077の北には、井戸SE9084がある。井戸枠は抜き取られているが、掘形の一边が約3.5mの大規模な井戸で、内部から多量の土器、木製品が出土した。

SB9077の内側南部には土坑SK9073があり、そこから短い南北溝SD9072が、建物外の土坑SK9071に向けて流

れ出す。SK9071の東には東西溝SD9052があり、SB9068の北で、東から来る溝SD9047と合流し、南北溝SD9048となる。SD9048は、北の宅地との境界で西流し、SD9054となる。

北の宅地には、SB8962・SB8997の2棟が建つ。SB8997は東西4間、南北4間で、南2間分は総柱となる。SB8997の西には、SB8962の西側柱列に柱筋を揃える掘立柱塀SA8996がある。井戸はSE8966・SE8968・SE8969の3基があるが、A・Bの時期区分は不詳。

B期 南の宅地では、A期の主屋SB9077を、ほぼ同じ位置で西に拡張して建て替え、SB9078とする。SB9078は東西、南北ともに7間で、A期のSB9077と同様の構造であったと考えられる。断ち割り調査の所見によると、南半部は柱穴が重複しており、部分的に建て替えがあったのであろう。その北に、SE9084をはさんでSB9082・SB9083がある。SB9082は2間×2間の総柱建物で、中央の柱のみ、礎石を用いる。SB9078とSB9082は西の側柱を揃え、塀SA9081で結ぶ。

SD9052・SD9047・SD9054はA期から存続するが、SD9048はSD9046につけ替え、SD9052は井戸SE9069以西が廃絶する。また、東面回廊の東に、新たに南北溝SD9044を掘り、北面回廊上を西流するSD9053につなげる。2条の南北溝SD9044・SD9046の間には、相互を連結する東西溝SD9054・SD9056~9059・SD9061~9063があり、回廊をはさんで梯子状の溝群を形成する。回廊部分の耕地化にかかわるものであろうが、具体的な機能については今後の検討課題である。

北の宅地には、SB8960・SB8976・SB9089の3棟がある。小規模な建物が散在する状況で、主屋は調査区外にあるのであろう。

なお、東第一堂の基壇上に、完形の土師器羽釜を埋納した遺構SK9079があるが、内部にはとくに納置物はみられなかった。このほか、A・B期以外の建物としては、SB9086がある。
(玉田芳英)

3 出土遺物

瓦類 昨年度の第100次調査に引き続き、大量の瓦類が出土した。内訳は、軒丸瓦7型式20種391点、軒平瓦5型式17種339点、丸瓦16,644点(2,220kg)、平瓦59,776点(6,049kg)、面戸瓦90点、鬘斗瓦119点、隅切瓦1点、谷

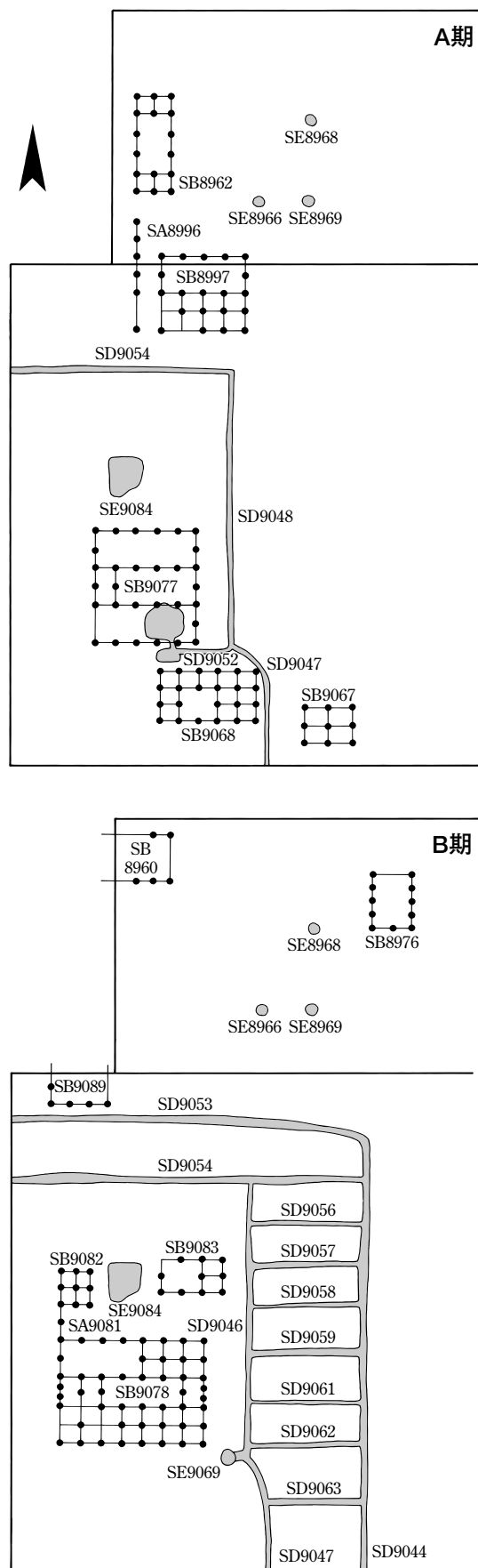


図59 平安時代末～鎌倉時代の遺構変遷図

表5 飛鳥藤原第107次調査 出土瓦集計表

軒丸瓦						軒平瓦					
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数
6233	A	2	6275	N	10	6561	?	3	6643	D	19
	Ac	1		?	5	6641	Aa	3	?	?	3
	Ba	25		6279	A	5	Ab	2	6647	B	1
6271	A	3	Aa		3	C	19	Ca	1		
	6273	B	25		Ab	78	E	12	D	1	
D		1	B	3	F	24	型式不明		46		
?	2	6281	A	40	?	2	合計		339		
6274	Ac		1	B	15	6642	A	80	面戸瓦	90	
	6275		A	87	Ba	4	B	2	熨斗瓦	119	
B		18	?	2	C	32	文字瓦	77			
C		20	型式不明	35	6643	Aa	2	隅切瓦	1		
D		1			Ab	3	谷樋瓦	12			
H		5			B	12	転用硯	1			
合計			391			C	72				

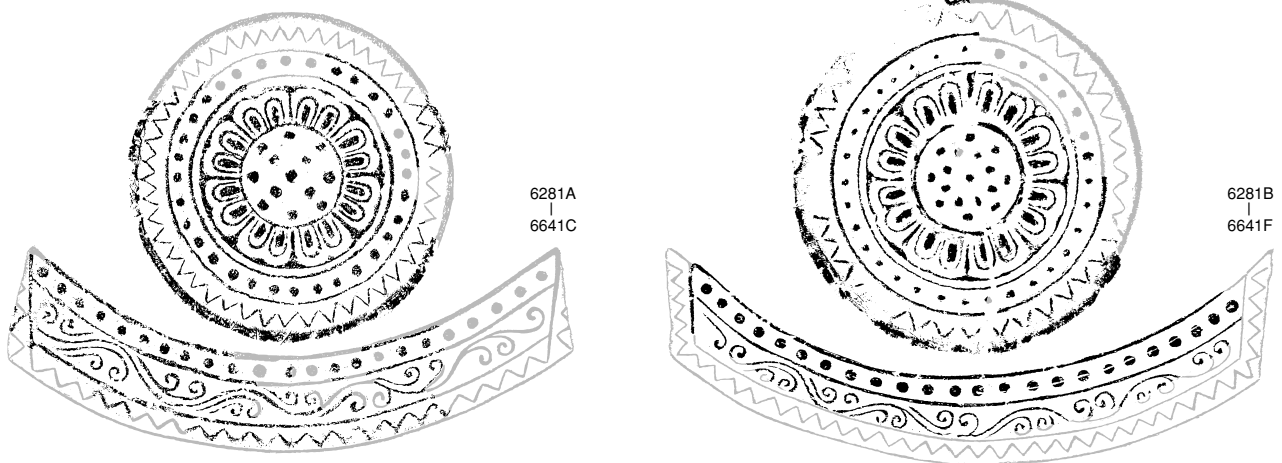


図60 朝堂院東第一堂の軒瓦の組合せ 1:4

樋瓦10点などである(表5)。

回廊所用瓦は、第100次調査で判明した6233Ba-6642Aの組合せのほか、新たに6279Ab-6642Cが加わった。また、第2次・第100次調査で検出した礎石建物SB530の所用瓦6275A-6643Cも回廊周辺から多く出土し、これを回廊所用と理解するか否かが検討課題となった。

宮造営時の排水溝SD9040・9080やSK9051から出土する瓦には、上記3組の軒瓦のほか、道具瓦や焼成時に焼きひずんだ瓦などが含まれており、いずれも造営途中で廃棄されたものと見て相違ない。SK9051出土瓦がどの建物に伴うものなのか、さらに検討が必要であるが、SD9040・9080出土瓦の様相からは、6275A-6643Cも回廊所用瓦であったと判断してよいであろう。3組の軒瓦とも、高台・峰寺瓦窯の製品である。

東第一堂の所用瓦は、6281A-6641Cと6281B-6641Fの2組であることが判明した。藤原宮朝堂の所用瓦が確定した初例である。前者は平群町安養寺瓦窯、後者は大和郡山市西田中瓦窯と内山瓦窯からの供給である。

6281型式は、平城宮第一次朝堂院南門の創建瓦である6282Aと紋様意匠が連続する。間弁どうしがつながる系統の軒丸瓦は、「藤原宮式軒丸瓦」のなかでは6281型式

が唯一であり、一方、平城宮造営当初に生産された「平城宮式軒丸瓦」では中心的な存在となる。したがって、6281型式は、藤原宮式軒丸瓦の中では最も新しい型式と理解されており、その年代観は、今後、朝堂の造営時期を検討するうえで重要な意味をもつ。

丸・平瓦の大半は粘土紐桶巻作りで、粘土板桶巻作りは丸瓦38点、平瓦181点と、全体の1%にも満たない。

道具瓦では、全長60cmを越える大型の面戸瓦が出土した。本薬師寺に類例があり、隅棟に用いられた登り面戸と推定される。熨斗瓦は、粘土板桶巻作り平瓦を素材にしたものが19点出土した。幅は8cmから16cmまであり、9~11cm、12~14cm、15~16cmの3群に大別できる。谷樋瓦は藤原宮内裏西南隅の第70次調査以来、2例目の出土。ヘラ書き瓦は、これまでの「+」・「キ」に加え、「ㄨ」が出土した。刻印瓦では、丸瓦玉縁端面に「⊕」を押捺したものが1点出土している。(西川雄大) 土器 量的には少ないが、藤原宮期の土器のほか、SD8992、SX9091から飛鳥Iに属する土器が出土している。また、SD9105・SD9106からは、奈良時代後半の土器や土馬、小型模造土器が出土し、廃都後の宮域の利用形態を考えるうえで注目される。中世のものとしては、

多量の土師器、瓦器がある。

木器・金属器・石器 先行四条大路南側溝SD9005から斎串が数点出土した。また、弥生時代のサヌカイト製石鏃と剥片、古墳時代の滑石製小玉、有孔円板もある。ほかには、石製巡方が1点、中世の可能性のある鉄製火打鎌が1点出土した。

4 成果と今後の課題

① **藤原宮期** 古文化研究所の調査で確認されていた朝堂院東第一堂と回廊について面的に精査し、遺構を再確認した。それにより、柱位置の正確な把握が可能となるとともに、東第一堂が凝灰岩、回廊の外壁は玉石の基壇外装をもつなど、細部にわたる構造が明らかとなった。最大の成果は、東第一堂の身舎内部には棟通りに礎石据付掘形がなく、総柱建物とならない事実が判明した点である。第二堂以下も同様であることは確実で、日本最古の本格的な都城である藤原宮から以後の都城への朝堂建物の変遷が、連続的にたどれることとなった。

また、東第一堂・回廊ともに、建設時と解体時の2時期にわたる多数の足場穴を検出し、回廊の雨落溝についても多くの知見が得られた。東第一堂は東西に3箇所ずつ、南北1箇所ずつの階段が付くことが判明したが、これに関しては若干の検討の余地が残る。

なお、東第一堂と回廊を調査したことによって、朝堂院の配置計画に一定の手がかりが得られた。まず、東第一堂の北妻は、北面回廊の棟通りから100尺の位置に設定されたとみられる。また、西入側柱列は、東面回廊の棟通りから100尺の距離にある。ただし、古文化研究所の調査によると、東第一堂～第四堂は西側柱列・西入側柱列を揃えるが、身舎の梁行柱間が異なるため(東第一堂は14尺、それ以外は10尺)、東第二堂～第四堂の棟通りは、西入側柱列より10尺東となる。つまり、東面回廊の棟通りから西へ90尺の位置にあり、それは朝堂院中軸線から300尺東の位置にあたる。朝堂の東西位置の基準となったのは後者である可能性が高いが、詳細は東第二堂以下の調査に待ちたい。

② **藤原宮直前期** 藤原宮造営時の整地土の下で、多くの溝を検出した。性格は、藤原宮に先行する条坊側溝と、藤原宮造営時の排水溝に分けられ、第100次調査での所見を一部修正することとなった。

まず、藤原宮造営のための運河とみていた溝SD9005は、先行四条大路南側溝であることが判明した。北側

溝SD8995とSD8991の心々間で14m(40大尺)ととっていた先行四条大路的幅員は、16m(45大尺)と修正され、ほかの偶数条坊大路的規模と一致することとなった。「先々行」四条大路的幅員(側溝心々間14m=40大尺)については、修正するような知見は得られていない。

なお、四条大路以南では、第100次調査で検出したような「先々行条坊」に比定できる溝はない。第100次調査の報告が想定するように、藤原京の造営が天武朝前半の676年に着手されていたとしても、その条坊施工は、藤原宮域に限っても全面的には及んでいないことが、あらためて明らかになった。

また、藤原宮造営時に多数の排水溝が掘られていることを確認し、排水体系が明確になった。東第一堂と東面回廊は沼地形を埋め立てて建設され、水処理が大きな問題だったのであろう。あわせて、東面回廊の東雨落溝は、回廊完成後には北面回廊北雨落溝とL字形に接続し、それを越えて北には延びないことも推定できた。

③ **藤原宮廃絶後** 奈良時代～鎌倉時代の遺構を多数検出した。奈良時代には東西に並ぶ建物と溝がある。平安時代には、多数の南北方向の溝と小規模な建物がみられ、この時点で宮殿跡地の利用形態は一変する。平安時代末～鎌倉時代には、集落の建物が方位に合わせて整然と並ぶことが判明した。建物内部に多数の柱を立てる構造のものが多く、建築史のうえでも注目されよう。この時期の集落は周辺にも広がるのが予想され、中世の集落研究にも貴重な資料を提供した。(玉田芳英)

表6 藤原宮大極殿・朝堂関係史料

698年(文武2)1月1日	天皇、大極殿に御して朝を受く。
701年(大宝元)1月1日	天皇、大極殿に御して朝を受く。
1月16日	皇親及び百寮を朝堂に宴す。
702年(大宝2)1月1日	天皇、大極殿に御して朝を受く。
704年(慶雲元)1月1日	天皇、大極殿に御して朝を受く。
1月25日	始めて百官の跪伏の礼を停む。
705年(慶雲2)1月15日	宴を文武百寮に朝堂に賜ふ。
4月22日	天皇、大極殿に御し、粟田真人ら三人を中納言に任ず。
706年(慶雲3)1月1日	天皇、大極殿に御して朝を受く。
1月7日	(新羅使)金儒吉らを朝堂に饗して、諸方の楽を庭に奏へまつらしむ。
707年(慶雲4)2月25日	天皇、大極殿に御し、授位。
7月17日	(元明)天皇、大極殿に即位。
709年(和銅2)4月27日	(新羅使)金信福らを朝堂に宴す。